# 【報告】

# 「ピープリング・オブ・ロンドン;ロンドンに集うひとびと」 ロンドン博物館による企画展の記録

# THE PEOPLING OF LONDON

—fifteen thousand years of settlement from overseas—

ニック・メリマン\*
Nick MERRIMAN
(訳・解題) 岩 本 陽 児\*\*
Yohji IWAMOTO

# ○歴史学界の論争と博物館展示

1970年代以来の論争に参加した考古学者や社会史家の間では、過去を市民に展示するにあたっては、必ず何らかのテーマ性があるということと、そのとり扱いがやむをえず部分的なものとなっているということが認識されています。

同時に、歴史における言説の鍵となる諸領域、すなわち女性史、労働関係と労働者階級の運動の批判的な読みとり、性とジェンダーの問題、文化の多様性の歴史といった内容を適切に展開することに博物館はつねに失敗してきたということも、繰り返し批判されてきています。

それでいて、そのような隠されてきた歴史や、潜在的に「むずかしい」テーマに対峙するような展示を企画したり、または、特定のテーマについての「視点」を実際に示したりすることで、このような批判の意義を自覚的に受けとめてきた博物館は、依然として少数にとどまっていたと言えましょう。

ロンドン博物館が、「ロンドンに集うひとびと」の 企画を構想したのは、このような状況を何とか出来 ないものだろうかという思いからでした。

# ○地域社会とかい離していた博物館

ロンドン博物館が市場調査を包括的に行うようになったのは、そう古いことではありません。しかし、そのおかげで、他の博物館と同様、来館者の構成比が地域住民の構成比に対応していないということが、1991年までには判明しました。

なかでも、1991年の国勢調査によればロンドンの 人口の2割以上がエスニックマイノリティ(民族的 少数者)に分類されているにもかかわらず、そのよ うな人々は、来館者のわずか4パーセントしかいな かったということがありました。

こうなった理由のひとつとして、ロンドン市の文化的な多様さに常設展でほとんど触れていなかったということと、とりわけ、戦後の展示を欠いているということに問題があるだろうとかねてから見当がついていました。

このように、ロンドン博物館で展示されている物語のなかにエスニックマイノリティの歴史に関する展示が皆無だったために、彼らの居住地域からの来館を引きつけるような動機が存在していなかったといえます。

このようなニーズこそ大切にしなくてはならなかったのに、ロンドン博物館は明らかに、そうした

\*ロンドン大学 (London Univ.)

\*\*レディング大学大学院 (Univ. of Reading)

平成10年1月6日 受理

人々五分の一の潜在的な要求をつかんでいなかった わけです。市民一般に責任を負う機関としても、そ の信用を得ることに失敗していたといわなくてはな りません。

さらにいえば、そのような住民からのニーズについては、少数民族コミュニティを出来るだけ展覧に巻き込んでいくことで歴史の展示の中身そのものを変えていくというやり方によって、これは大切なことなのだと強調していくべきだと考えられました。(訳注、エスニックマイノリティは特定の地区に集住することが多い。ロンドンで代表的なものは、ブリクストンを中心とした南部のカリビアン街、北部のユダヤ人街、中心部ソーホーの中華街など。ロンドン在住の日本人の居住形態にもこの傾向が幾分か見られる。)

#### ○人種差別主義の神話をこわす

景気が後退して、同時に、東欧の共産主義国家が 崩壊してゆくにつれて、ヨーロッパ大陸のあちこち で、人種差別主義と、排外主義とが高まってきてい ることについては、私たちがげんざい目撃している とおりです。

極右グループの論理構造は、多くの場合、少なくともこの国で見られる限りにおいては、過去を神話的な見方で構成した歴史観、つまり、白人だけからなる戦前の均質な社会が、戦後になってから、違った肌の色と習慣をもった、そしてこの次が問題なのですが、この地に属していない人々、が入りこみすぎ、おかげで腐ったのだという見方の上に成り立っています。

一般市民に過去を展示する施設として、私たちの博物館の職員の多くが、博物館というものが、このような神話を吹き飛ばし、それらがまちがった歴史の読みとりに基づいたものだということを示してみせることで、有意義な社会的目標に奉仕できるのではないかと、つねづね感じていました。

最終的に、ピープリング・オブ・ロンドン、海外から移り住んで1万5千年、と銘打つことになるこの企画にとりかかろうではないかと構想を練っていくうちに、次のような考えが次第にはっきりしてきました。

この企画は、移民は戦後の現象という見方と違い、

ロンドンというところは、ローマ時代にその基盤を 得て以来ずっとコスモポリタンの、文化的に多様な 都市としてあり続けてきたのだという展示によって 構成しようということになりました。

都市の発展のもようを明らかにするために、海外からやってきて住みついたさまざまな人びとの歴史をたどることで、私たちは、普通だったらロンドン博物館に来なかったような少数民族コミュニティの人たちにとってもなるほどその通りだと思われるような、それまでは隠されていた歴史を明らかにしていきました。

# ○地域に根ざす─展示づくりの過程

今回の展示をつくるに当たってロンドン博物館では、博物館の常套手段つまり、例えば自分のところの収蔵品をあらためたり、適切な資料を他館から借り出してきたり、ということの他に、いくつかの新しいやり方を採用しました。

非常勤研究員として、ロジナ・ビスラムさんが二年間の任期で、地域の文書記録の中から1次資料・2次資料を発掘したり、助言や情報提供で私たちを支援してくれそうな少数民族コミュニティの人々を探し出したりしました。

この点をさらに広め、さらにこのような新しいやり方を宣伝するために、「ロンドンに集うひとびと」の企画についての展示をキャラバン車の「移動博物館」に載せて、ブリクストン地区やハックニー地区など、これまでロンドン博物館への来館者が多くなかった地域の公園や市場、スーパーマーケットなどの駐車場を巡回しました。

こうした地域をカバーしている情報メディアに参加したこともあって、これらの活動のおかげで上記の地域からは通常に比べてずっと高い割合で来館者を獲得することができましたし、多くの人が私たちに連絡をとってくれて、資料を貸してくれたり、聞き取りに応じてくれたりしてこの企画を支援してくれるという好結果がもたらされました。

この方法によって、また、少数民族コミュニティのひとびととの接触がはかられたことによって、この企画の全体に関係してくる要素である口述史

(オーラルヒストリー)は次第にその比重を増してゆき、最終的には65名の人々が聞き取りに応じてくれて、海外からロンドンにわたってきた時の経験を語ってくれました。これらの記録から取り出された事実が、最終展示づくりと解説書づくり(訳注、図録と同様の体裁だが、記述が主体となっている。ロンドン博物館から刊行された本企画展と同タイトルの本書は、ISBN 0-904818-59-4)に役立ちました。(訳注、ロンドン南方の、いずれもカリブ海系黒人の多い街として知られているところ。)

# ○口述史のはたした役割

口述史(オーラルヒストリー)は、幾つもの理由から、このプロジェクトにおいて特に重要な役割をはたしたといえます。

まず、このおかげで、従来の展示ではおろそかに されることの多かった、生身の人間という側面をつ け加えることができました。

次に、これによって市民がプロジェクトに参加するようになっていくという、双方にとって有意義な、 交流の筋道づくりが可能になりました。

第三に、これは移民第一世代の経験の記録として 価値ある一次資料をもたらしてくれました。こうい うことでもない限り、彼らの歴史が公式に書き残さ れるというようなことは、まずなかったでしょう。

#### ○協働体制

これと並行して、連絡のとれた人々や助言者のネットワークが作り上げられていきました。これは、海外からの移民というテーマを、その少数民族コミュニティを描き出すという仕事、人種差別主義、それに対する闘いという諸テーマと関連づけながら追究していく上で、とても重要な役割を果たしてくれました。

ブリクストンにある黒人文化文書館、ロンドンに 二館あるユダヤ人博物館と私たちの間に、実り多い 協働体制がつくられていきました。その他の少数民 族コミュニティの機関や個々人との間にも同様に、 実り多い協働体制が結ばれ、解説文を査読しても らったり、展示の際にはこまごました問題について 助言を受けたりすることができました。

地域の助言者たちの中でも、特に重要な役割をは

たしたのが解説書の執筆者です。解説書では、アフリカ人・カリビアンからスペイン人まで、ロンドンにある13の少数民族コミュニティの歴史について一連の論考を収録しています。

執筆者のほとんどは解説を担当した少数民族コミュニティの出身で、そのため、各章にはそれぞれの少数民族コミュニティならではのものの見方が何らかの形で盛り込まれています。展示づくりに当たっても、彼らの助言を生かすことができました。

# ○展示の内容

最終展示自体はレッドマンデザイン社により設計されましたが、戦後期を「都市の中の世界」と銘打ってテーマ的に扱ったところから始まり、これに5分間のビデオによる、展示の主要テーマの概説が続きました。

この導入部のあとで、観客はロンドンにおける海外からの移住の歴史を7つの大きな領域にわけて観覧するようになっていました。

ロンドン以前 (ブリテン島に人が住んでいなかった氷河時代から始まる)

ローマ時代のロンドン 移民の時代、450-1066 中世のヨーロッパ人、1066-1500 ロンドンとより広い世界、1500-1387 といったようなものです。

この他、小さな領域がいくつもありました。「港での生活と労働、1837-1945」といった特定のテーマのものや、「初期の黒人と南アジア人、1500-1837」といった特定の少数民族コミュニティに関するものなどです。

展示パネルの解説文はすべて英語でしたが、9カ 国語で書いた展示要旨の小冊子を会場入り口に用意 しておきました。

#### ○市民向けプログラム

展示と同様に重要だったのが、それを補う役割を もった、市民向けの催しその他の事業でした。

展示づくりの過程そのものに、ロンドンの少数民族コミュニティメンバーが積極的に参与するという ことは、実際の問題として困難でした。 そのため、少数民族コミュニティとの間につくられた関係は、現場で協働するというよりはむしろ、こちらの相談に乗って情報を提供してもらうという性格のものになりました。

そこで、この市民向けプログラムは、展示の視点をさらに強調したり(ときには、それらを論議の対象にさえもしましたが)、展示に新しい見解をつけ加えたり、ロンドン博物館に新しい来館者をもたらしたりする事を通じて、少数民族コミュニティをできるだけ巻き込んでいく役割をもつように配慮しました。

市民向けプログラムの中心となったのが一連の「特別週間 (フォーカス・ウィーク)」で、少数民族コミュニティグループにお願いをして、館の施設を使って、ロンドンにおけるそのコミュニティ独自の歴史と文化を1週間にわたり、他のロンドン市民に示してもらいました。

いろいろな少数民族コミュニティが、この短い期間を思い思いに利用してくれましたが、そのやり方について、博物館スタッフは、監修者として口をはさむようなことは一切しませんでした。

内容としては、小展示、演劇、語り聞かせ、詩の 朗読、民族衣装大会、料理の試食、民族音楽の演奏、 現地での歴史散歩、映画、講演、公開討論会などが ありました。

このような段取りのおかげで、人々が自分たち自身の声で自らを表現することが可能になり、この点は特に成功でした。しかも、ロンドン博物館の広報活動と並行して、それぞれの少数民族コミュニティが自分たちで宣伝してくれたため、展示とこうした催しとが二重のきっかけとなって入場者数の増加に貢献してくれました。

特定のコミュニティ(例えばアイルランド人、南アジア人、キプロス人、中国人)にねらいを絞った週間には、ロンドンの特定地域(ソーホーやスパイタルフィールズ)、特定の利害集団(難民)といった問題に焦点を当て、「女性の経験」、「なになに人というステレオタイプ視」といった特定のテーマについては、連続講演会といったプログラムを用意しました。

このような市民向けプログラムの一方で、学校教育プログラムも特別に作成しました。

カールトンテレビから少額ながら資金提供を受けられたおかげで、教師用教材をつくることが出来ました。エスニックマイノリティに関する基礎的なデータ、全国カリキュラムの複数科目にこのテーマをどう関連づけていくかという方法論、および実践的な事例を収録しています。

教育芸術家・工芸家連盟(ACE)でもプロジェクトを推進し、学校からのグループと協力して、このテーマの趣旨を生かした作品を制作しました。

市民向けには、地元の芸術家、ティモ・レートネンさんが二ヵ月にわたって任用され、展覧会場に隣接した屋外スタジオで活動を組織しました。

(訳注、1988年改正教育法によりイングランド、ウェールズに導入された。義務教育の各学年における教科の教育目標を政府が全国的に標準化したもの。指導方法は現場の裁量に任されているという点で、日本の学習指導要領とは異なる)

#### ○情報づくりと評価

この展覧会の広報活動のために、ロンドン博物館では少なからぬ時間と資金をつぎ込みました。通常の広告媒体以外にも、少数民族の報道機関やラジオ・テレビ局にも情報を流した他、タイムアウトのような主立った週刊誌にも、お金をかけて広告を掲載しました。

広報宣伝のうちで最も成功したのが、ロンドン地 下鉄での広告キャンペーンです。これは特に、アフ リカ系・中国系・カリブ系・南アジア系の人々を対 象に、こうした少数民族コミュニティがいかに古く からロンドン市民の一部をなしていたかという事実 を指摘する内容のものでした。

入場者の7パーセントが、このポスターキャンペーンで得た情報によって来館したということが後の調査で明らかになりましたが、この他に24パーセントの人が、そういえばポスターは見ていたと答えています。

(訳注、ロンドンのイベントガイド。主に若者を読者 層としている。)

この企画は、当初から評価することを前提につくっていましたから、特定の目標に関して、どの程度 成功したかを測定することが可能でした。 より広範な人々を魅了したという点で、この企画 展は特に成功を収めたといえます。つまり、展示期 間中に、エスニックマイノリティの入場者は20パー セントに達していました。

全体として、この展観は9万4349名の入場を得ましたが、これは予測一特にこの企画展では入場料を 徴収する、ということが決定された後の一を上回る ものでした。

期間中、ロンドン博物館の来館者全体の64パーセントがこの展覧に足を運んでおり、市民むけの催しには、延べ8.428名の人々が参加してくれました。

「移民は戦後の現象」という考え方に挑戦し、これまで明るみに出されていなかったロンドンの文化的な多様さの歴史を明らかにするという目標は、展覧をつくりあげる過程を通じて達成されました。

メッセージがどの程度表明されたかについては評価できましたが、どの程度、文化的なステレオタイプ視におちいることを避けながら歴史を描写することに成功したかという点については、評価が困難でした。

これらの問題は、研究班の一連の課題となりました。このグループは東ロンドン大学と連携して統轄され、芸術家協会によって取り組まれていて、94年の秋遅くに報告書が出される予定です。

すでに判明したかぎりでは、この種の展示には、 メッセージに心情的な共感をすでに持っている人達 がやって来ることが多く、展示チームによって意図 された展示のメッセージを理解する心の準備がすで に出来ているということのようです。

研究班は、例えば特定のグループが除外されていることや、別のことに当てるべき空間的なゆとりのなさ、ステレオタイプ視やこども達への配慮を欠いていることなどとともに、移民の経験のうちの、それほど積極的と思われない部分を示すことへのためらいなど、考慮しなくてはならないいくつもの領域を明らかにしています。

早くから心配していたことではあったのですが、 最終展覧が、広大な時間の幅のなかで多数の少数民 族コミュニティを扱うということのために、このプ ロジェクトの当初の重要な目的、つまり、少数民族 コミュニティグループに積極的な参与を求める、という点が実際のところ不可能になってしまったのは 残念な事でした。

# ○この企画展の意義

しかし、全体としてみれば、この展示は、それ自体の基準に照らして、比較的に成功を収めたといってよいだろうと思います。

今回の予算規模は、プロジェクト全体で14万ポンドと大きなものでした(訳注、円が強かった当時のレートで邦貨に換算すると約2,300万円に相当)。そのうち4万ポンドは特にバーリング基金とシティパロキャル基金から寄せられました。しかし、この企画展示が採用した方法論は、少ない予算しか動かせない博物館でも十分に取り組めるものです。

実のところ、この領域で新しい地平を開くような 仕事は、地域の少数民族コミュニティとの密接な関 係を育ててきた小規模館で取り組まれてきたもので すし、上記したような発想そのものは、すでに、別 のところで取り組まれているものです。

しかし、規模が大きく、文化的に権威を認められているロンドン博物館のような機関で、このようなプロジェクトに取り組み、そして、このプロジェクトのために相当の資源を投入して、ロンドンの少数民族コミュニティにこの問題の重要性を示してみせたこと、それと同時に、一見して難しく論争的なこの問題に対しても、十分に取り組めるのだということを博物館界に示してみせた点で、意義を持つものであったと考えています。

展覧の文書記録と、その調査に関する資料は、ロンドン博物館に照会していただければ入手が可能です。ロンドン博物館では最近、常設展示を改装し、ロンドンの物語を現代にまで拡張することを決定しました。これによって、「ロンドンに集うひとびと」を作り上げていく過程で明らかになったいくつもの新しい知見と、地域社会に出かけていって人々を巻き込んでいき、人々中心のアプローチを提唱していくといったその方法を生かす機会がでてきました。

© N. Merriman/ UNESCO 1996 Japanese translation by Y. IWAMOTO

# 解 題

Ι

このピープリング・オブ・ロンドンの企画展は、1994年の早春から夏にかけて、ロンドンシティ(旧城塞都市)の一画にある市立ロンドン博物館で開催され、その成果は、同年秋の博物館協会(The Museums Association、イギリス)第100回記念ブライトン大会で報告された。本文はこの時のオリジナルのペーパーからの翻訳である(EL)。

この企画展から3年余りを経過して、今日では、都市部を中心に、欧米各国の博物館で本展に触発された多文化の展示が日常的に行われ、これはひとつの傾向としてもはや定着したと見なされている。世界の博物館界に対するイギリスからの貢献としての本展の意義にかんがみて、今回、日本語で紹介させていただいた(12)。

II

本展の背景について、若干補足しておこう。

まず、当時の社会情勢。当時のイギリスは、80年代後半に未曾有のバブル景気を経験したのち、90年代になると失業率が10パーセントを超える深刻な不況に突入していた。折から、ソ連邦の崩壊したヨーロッパ各地では民族紛争が頻発し、緊張が高まっていた時期である。その後、北部ブラッドフォード市で南アジア系住民の暴動が起きたことからも分かるように、いつ、国内各地で不幸な事件が発生してもおかしくない状況だったといえる。

次に博物館の側の事情。これには二つの側面がある。

消極的な側面としては、漸減していく文教予算のもとで入場料収入への依存度を高めなくてはならない、つまりは入館者を拡大したいという、博物館の生き残りに関わる問題がひとつ(153)。その方法論として、入館者の市場調査が重視されるようになってゆく。

積極的なものとしては、その過程で、本文にもあったように、当事者が意識するしないにかかわらず、博物館が社会の多数者の側の支配的な価値観を拡大再生産する場となっているという従来からの批判が

実証されるかたちで、博物館のひとつの実態が明ら かにされたということである。

そうしたデータに基づいて、では、こうした社会の状況に対して博物館からはいったい何ができるのだろうかという問いかけから、本展は企画されている。つまりこれは、社会のマジョリティの側からのアプローチであり、厳密にはそこに一定の限界もあったと見なくてはならないだろう。

とはいえ、これは大型館がそれまで無視しつづけてきていたある意味でのタブーに、「世界最大のシティ・ミュージアム」が挑戦した意欲的な企画展であり、形態こそ違え、民族的、文化的なマイノリティコミュニティをネガティブな存在またはタブーとして多くの地域にかかえている日本の社会に示唆するものは少なくないだろう。

本文に述べられている展示づくりの方法論には、 興味深いものがある。地域住民との共同作業を通じて「知られざる事実」が掘り起こされ、聞き取りの録音資料など従来の博物館収集品とは趣を異にした資料もコレクションに加えられ、社会に還元可能な博物館の資産となってゆく。一般に、エスニックマイノリティのコミュニティでは、二世三世が増えるにつれてコミュニティとしての文化アイデンティティが希薄化してゆくことに危機感をもっており(ま4)、ロンドン博物館からの協力要請は、彼らの意向にかなったものだったと推察される。口述史は、民衆による地域史復元の素材としての資料価値ばかりでなく、博物館と地域史そして高齢者福祉との接点というべきルミネッセンスワーク(回想療法)の方法論としても注目を集めている。

III

その後数年を経て、イギリスの博物館界は、さら に大きく変わりつつある。

景気は回復し、97年5月の総選挙で政権は労働党へと移ったが、国際競争に勝ち抜く強い経済体制づくりを主眼とする国策にそって、教育、文化、福祉の再編が進行している。博物館にとっては依然、厳しい状況である。

本展の会期終了後に導入された、全国宝くじ (National Lottery)の収益による文化財宝くじ基金 (Heritage Lottery Fund) の補助金は、導入前から 批判の多かったさまざまな問題点をそのままに、文教予算の削減という現実の前に結局受け入れられざるをえなかった。その交付で比較的有利になりがちな国立巨大館とそれ以外の館との格差の拡大が懸念されている(IBS)。1997年度の博物館協会 (MA) 大会は、"National and Non-National"というテーマを柱のひとつに掲げ、両者のよりよい関係づくりが議論された。

そうした一方で、本展に対しては有意義なデータを提供したマーケティングをことさらに重視する風潮が助長され、学芸職員を減らしてでも市場調査担当職員(マーケティングオフィサー)を増員するという館が増えている。その結果、深刻な問題も発生している(#5)。

シェフィールド市では、財政難のあおりを受けてついに市立博物館のトラスト化が決定された(町)。職員の待遇などで比較的優遇されてきた大学付属館でも、学外の市民向けサービスのコストについては大学予算の枠外として独立採算を要求されるところが増えつつある。博物館ボランティアも、これまでとは違った意味で注目を集めるようになっている。

博物館界としては、このような流れに対して、従来の学芸職がコレクション中心であったことへの反省も込めて、いかに地域社会に密着した良質の活動を展開するかという方向に活路を見出そうとしているように見受けられる(tb)。その時、ひとつの成功事例として関係者に想起されるのが、このピープリング・オブ・ロンドン展である。

#### IV

ニック・メリマン氏は、考古学を専門としており、博物館考古学者 Museum Archaeologist グループの主要メンバー。ロンドン博物館在職中に学位を得て、この報告の当時は先史時代部門の主任であった。彼のチームは、80年代のロンドンドック地区再開発にあたって多数の緊急発掘を手がけ、その成果は、ロンドン博物館の他、ロンドン塔の傍らにある私立館タワーヒル・パジェントおよび併設のウォーターフロント博物館(博物館年度大賞受賞館)の常設展示で生かされている。1997年からロンドン大学上級講師。主著に、ケンブリッジ大学に提出した学位論文にもとづいた Beyond the Glass Case, - The Past, the

Heritage and the Public in Britain— (Leicester University Press, 1991)。他に児童書もある。

#### 注

- (1) 94年の大会報告の後で、ユネスコ、Museum International 誌、95年春号 (Vol. 47, No. 1 ISSN 1350-0775) に原著者による同趣旨の報告 (英文) が掲載された。原著者および UNESCO との調整の結果、本稿 (日本文) の著作権も両者 に帰属するものとして取り扱うことになった。
- (2) 本展も含めて、イギリス各地の博物館における 多文化展示の実践について整理したことがあ る。拙稿、「博物館における多文化教育―イギリ スの事例から―」日本社会教育学会編、『多文化・ 民族共生社会と生涯学習―日本の社会教育、第 39集』、pp.145-157、1995年、東洋館出版社。
- (3) だが、現実にはほとんどの館でここ数年、入館者の減少に直面している。このロンドン博物館でも93・4年の296,247人が翌94・5年には26,9859人と9パーセントの減であった。(Museums Association刊、Museum Yearbook, 1995/96および1997/98年の各号から)。経済活動促進のための規制緩和の結果、市民の日曜日の過ごし方が変化したことも原因のひとつと考えられている。
- (4) 例えば、在ロンドン中国人コミュニティでは、 自宅以外の場所では常に英語で暮らしているため上の世代との間に意志疎通の問題を生じがちな子どもたちを対象に、母語(主に広東語)を教える補習校を開校している。これは週一回、土曜日に開かれているが、主に弁護士、税理士などの専門職についている中国人が「コミュニティへの恩返し」として交通費実費程度の報酬で教師を務めている。
- (5) これは国立大規模館の財政に不安がないという 意味ではない。大英博物館ではすでに、政府か らの補助金なしに無料入館制は維持できない と表明しているし (Museums Association 刊 Museums Journal 誌、ナショナル・ギャラリー では無料入館を守ろうというキャンペーンを 行っている (98年春現在)。1997年 9 月号、p. 5。 ISSN 0-027-416-X)、1996年秋に寄付制から有

- 料化に踏み切ったビクトリア&アルバート博物館(大人5ポンド、割引3ポンド、学生・こどもは無料。1ポンドは現在約230円に相当)では、一年経ったところで年間入館者が20万人近く(率にして11-15パーセント)減少したことが判明している(Guardian紙 97年11月12日号)。
- (6) 人口26万6千人のノッティンガム市では、全体で540万ポンド(現在の邦貨にして約10億8千万円)に及ぶ予算削減を受けて博物館の常勤学芸職の定数を数名削減し、非常勤とした。その結果、監督機関である博物館・美術館局(MGC)は
- 監査の後、十分な博物館機能に支障をきたす懸念があるとして、登録館としての地位を暫定的なものに降格させた。これまでにない出来事である。(Museums Journal 1997年12月号、p.5)。
- (7) Museums Journal 1997年11月号、p.5。トラストは非営利目的の法人として税制面などで優遇されているとはいえ、民間会社であるため、倒産する可能性がある。
- (8) 1997年の博物館協会大会では、もう一方の柱を The New Working Order と題して、この問題 を集中して議論している。